

富士川そのむかし

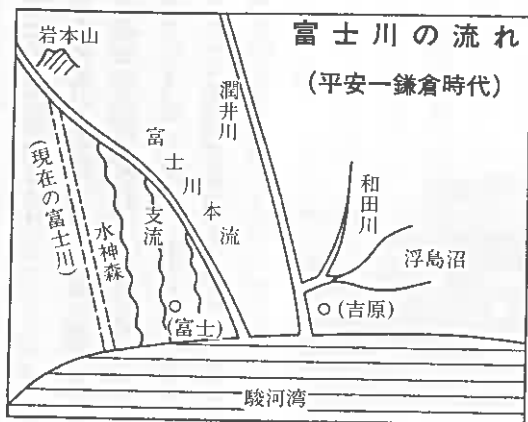
今から三百年ほど前、古郡三代ふるぐんが五十年の歳月をかけて雁堤かりかみづみを築き、富士川の水を治めて以来、新田が開発されるなど、富士川は私たちの生活に役立ってきました。

それではずっと昔の富士川はいったいどんなだったのでしょうか。

急流たぎりたつ暴れ川

富士川は現在すつかりおとなしくなっていますが、その昔は日本三大急流の一つとして知られていました。

上流部にあたる甲府盆地は、大昔湖であったといわれます。その水は岩を削り、滝と



昭和五十六年十二月五日号

なつて駿河湾へかけ下つたのです。

特にひとたび大雨が降ると濁流がふくれあがり、見さかぬもなくあらゆるものをのみこみ、災害をもたらす「暴れ川」だったので。広大な扇状地一帯が富士川の川原であり、流路でもありました。

奈良時代の万葉集には「富士山から流下した水のたぎりたつ川であつた」と記されています。

通船により交易物資が

江戸時代になつて、京都の豪商角倉了以は徳川家康から、富士川通船を命じられました。家康は軍事上の理由から富士川に橋をかけることを禁じていたのです。

土木事業家でもあつた了以は、苦心して川

中の岩をとり除く工事を行い、慶長十二年（二六〇七年）通船を開始しました。

甲州（なごま）鍛沢から岩本まで、馬で三日の道のりを半日で下ることができ、村々は賑わいました。しかし、上りは綱を引いて川をのぼりました。

最盛期には千五百艘の舟がありました。昭和三三年の身延線の開通により、その姿を消しました。

舟による富士川の渡し

